

永遠に生きつづける高南の校歌とたたかい

まぶしい青年の姿

民主教育研究所『人間と教育』

編集長 梅原利夫

1905年1月8日、私は一人で大阪・高槻市に向っていた。午後から開かれる「高南もちつき祭」に参加するためである。祭りの冠には「高南『教育権』裁判終結『教育行政オンブズマン—高南ネット』結成記念」が掲げられている。単なる新春もちつき大会とは違う。かたい表現の会の結成だが、たしかに誇り高いはなやかな祭りなのである。

会場には80名余(ママ:インス編集部注 実際は百余名)の参加者があり、その中にはこの間に出会った懐かしい元高南高校生の姿が見られた。今は大学生になっている青年たちは、皆ぐんと大人になっていた。若者の成長と発達は早い。まずそれを実感し、羨ましく感じた。つい2年半前には、突然の高校廃校の発表に驚き、夢中で学校内での討論を重ね、震える身体で街頭署名に立ち、高校生のユニークなデモを創りあげて行った「あの青年たち」だ。それがどうだ、今は堂々とし晴れ晴れとした表情で、久しぶりに会った友との再開を楽しんでいる。

第二部の「新春のつどい」は、完全に卒業生と現役生とがリードした、もちつきあり歌ありクイズあり挨拶ありの立食パーティーである。互いにこれまでの闘いをふりかえり、勝ち取ったものに確信を持ち、有意義な高校生活を送ってこられたことへの満足感が漂っていた。その中で、私にとっては初めて聞く「大阪府立高槻南高等学校校歌」が合唱された。この歌も、3月の卒業式で最後になる。

槻の木は 大地に立ちて / 根を深く 真理の泉 / 求めてやまず / 集いよる
学び舎ぞここ / たましいの かがやき白し (三番)

この歌詞に、私は思わずむせび泣いてしまった。この校歌の精神をまつとうに受け継ぎ、ひたむきに「真理の泉を求めてやまなかった」のは、まさにここに集う青年たちだったのではないか。それに比べて、大阪府教育委員会のとった態度は、対極にある虚偽の卑劣なものだった。これから社会に出て行こうとする青年たちは、「世の大人世界」の説得力のない貧しい廃校決定の「屁理屈」に、大いに失望しまた深く怒ったのだった。

ことの経過を大づかみで言うと、こうである。2001年8月に、府教育委員会は「高南」の廃校を提案し、16万人もの反対署名を無視して、11月の

委員会で決定してしまい、02年12月の府議会もそれに同調してしまった。その決定の取り消しを求めて2003年3月に訴訟に立ち上がった。被告は大阪府知事に対して、原告はなんと59名の高校生（新旧生徒会長、卒業生を含む）であり、PTA役員をはじめとした121名の父母が共同親権者として名を連ねたのだった。圧巻は03年7月の第一回口頭弁論や、2004年3月31日の全日にわたる審理の場だった。ここでの原告高校生（卒業生を含む）の証言は、高校廃校に道理がないこと、なぜ私たちの高校がそうなのか府教委は全く説明できなかったこと、このように充実した高校生活が一編の決定で破壊されるいわれはないこと、などを正々堂々と語った。法廷を圧倒した感動的な場面だった、と今も語り草になっているほどだ。しかし、04年9月に「不当判決」が出され、法廷での闘いでも壁で立ちふさがれてしまった。

そこで裁判は終結し、新たな組織として「教育行政オンブズマン—高南ネット」を結成して、今後は広く「民主的な教育行政を実現する」運動を続けていくというのだ。

会が終わってから、駅前の飲み屋で闘いを支えた父母・教師・弁護士らとの交流会を持った。「ああ、この人たちに支えられて、あの偉大な青年たちの闘いがあったのだ」と、再び感動した。みな、教育に熱心で、青年たちを信頼し、そして自分たちの成長・変化を求めて闘って来られた。この時の日本酒は特に肚にしみわたった。

私は、祭りの席で「この闘いで生み出した三つの宝物」について発言させていただいた。その第一は、行政と司法の場では勝利できなかったが、市民の場と市民法廷では主張は説得力があり大きな支持が得られたこと、第二は、高校生は多くの人々と手をつなぎ、人間や大人は（一部にひどい人もいるが）信頼に足るものであることを、身をもって実感できたこと、第三には、闘いの中で学んだ多くのこと（府教委の実態、高南の値打ち、運動の中での自分の進路など）は、これからの生き方の指針になりうる、という内容である。

この思いは、05年3月末で廃校になってしまった今でも、変わることはない。高南の校歌の精神は、私たちの中に生き続けている。

（2005季刊46号「人間と教育」）